

追悼

岡田博有先生を偲んで

北里 洋

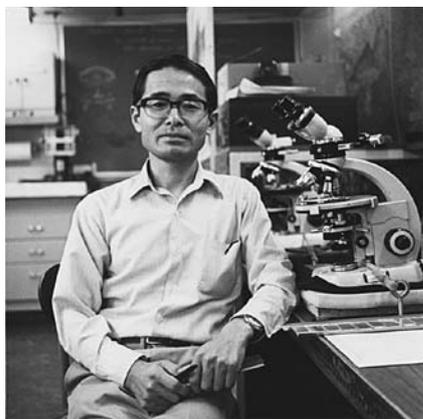


図1. 共同主席研究者を務められた深海掘削計画第56次航海の際の Glomar Challenger号上での岡田先生 (Special Collections & archives, UC San Diegoの許可を得て転載)。

「2017年12月22日に日本古生物学会特別会員の岡田博有先生が逝去された」との報を、年が明けてから伝えられた。享年84歳とのことであった。静岡で一緒にいたところの元気なお姿が目には浮かんだ。もう30年以上前のことになる。

岡田博有先生は、昭和8年(1933年)、大分県国東市に生まれている。1956年九州大学理学部地質学科を卒業。そのまま同大学院理学研究科に進学され、1961年に博士課程を修了。理学博士の称号を授与されている。すぐに九州大学助手に採用され、その後、鹿児島大学教養部、静岡大学理学部地球科学科を経て、九州大学理学部地質学科教授を最後に2007年3月に定年を迎えられている。九州大学理学部地質学科層序学講座は、岡田先生が学生時代を過ごされた古巣である。岡田先生が学生の頃は松本達郎先生が創設以来の教授として、席を占めていた。この層序学講座には、速水 格先生、小澤智生先生を始めとする多くの古生物学あるいは層序学研究者が在籍し、競って研究を行い、輝かしい成果を挙げていた。日本のみならず、世界に冠たる地質学・古生物学の名門講座である。岡田先生は、松本先生の後任である勘米良亀齢先生の後をさらに継いだのである。なお、岡田先生の同世代には、速水 格先生、鎮西清高先生などの秀英が揃い、時代をリードしている。まさに花の昭和8年生まれである。

岡田先生のご専門は、堆積学、堆積岩岩石学である。九大、松本講座で堆積岩の研究?と思うが、九大層序学講座からは、化石の研究だけでなく、地質学の様々な分

野の研究者が生まれている。岡田先生は、初期の研究では、日本の中生代の砂岩組成についての実証的な研究を行い、分類を行なっている。その成果は内外の雑誌に公表し、高く評価されている。1964~1965年には、British Council給費留学生として、英国中部にあるReading大学堆積学研究所に留学し、多くの堆積学の俊英たちと机を並べている。P. Allen, A. J. Smith, D. J. Doeglasなど、国際堆積学をリードした学者たちと親交を得たことは、岡田先生のキャリア形成に大いに役立っている。帰国後に、Journal of Geologyに掲載された砂岩の分類に関する総括論文(Okada, 1971)は、岡田ダイアグラムの名称とともに、諸外国の堆積学教科書に広く引用されている。

その後、先生のフィールドは、陸域から海域へ、そして堆積作用に関する研究へと広がっていった。この時期はプレートテクトニクスの興隆期に当たっており、その実証に向けての国際深海掘削計画、日仏KAIKO計画という巨大プロジェクトが走り始めていた。先生は、これらのプロジェクトに参加し、国内外の研究者たちと共同して重要な成果を生み出して行った。日仏KAIKO計画では、自らフランスの潜水船に乗り込み、4,000mを超える深海底を調べ、島弧海溝系におけるテクトニクスと深海堆積作用に関する研究成果を発表されている。また、1977年には、国際深海掘削計画(Deep Sea Drilling Project)第56次航海(Leg 56)に、共同主席研究者(図1)として乗船し日本海溝におけるテクトニクスとその発達に関する先駆的研究を行った。

学界においては、積極的に後進の指導にあたり、国内外の堆積地質学の分野で活躍する第一線の研究者たちを育てている。その過程で、日本地質学会会長、日本堆積学研究会会長(図2)を歴任され、また、国際堆積学会評議員も務められている。2006年には、福岡市において、岡田先生を名誉会長にして、第17回国際堆積学会議(International Sedimentological Congress, ISC)が開催されている。学者冥利につきる定年の迎え方である。

さて、筆者は、岡田先生と同じファカルティの一人として、静岡大学において過ごさせていただいた。静岡大学理学部地球科学科は、ほかの地方大学と同様に、文理学部からの改組に伴って1976年に創設されている。岡田先生は国立大学で初となる海洋地質学講座を担当すべく、鹿児島大学から招聘されたのである。私はというと、教官定員12名の地球科学科にあって最後のメンバーとして1979年10月に滑り込んだ新参者であった。当時の静岡大学は、池谷仙之、新妻信明、荒井章司氏を始めとする錚々たるメンバーが揃い、日夜研鑽に励んでいた。岡田先生は、海洋地質学がプレートテクトニクス発展の根幹を担う、海域を中心とする総合的な地質科学であることを目指して、この分野の興隆に努力されていたのである。地球に関するパラダイムシフトであるプレートテクトニ



図2. 1997年10月に静岡大学にて開催された堆積学研究会にて記念講演を行われる岡田先生（日本堆積学会の許可を得て転載）。

クスが興隆する中で、地球科学の研究教育の現場に居合せ、肌で感ずることができたのは幸せであった。例えば、日仏KAIKO計画では、清水港がフランスの潜水調査母船ジャン・シャルコー号の基地となった。そのため、清水での上下船時には、X. Le Pichonを始めとするプレートテクトニクス確立を担った研究者たちが静岡大学を訪れた。プレートテクトニクスの先駆けとなる海洋底拡大説をHessとともに提唱したDietzを目の当たりにすることができたのも、静岡であった。それに加えて、岡田先生の元には、G. Klein, A. J. Smith, J. H. McD. Whitakerなどの世界の堆積学者たちが訪れたのである。その時の静岡は、例えば、渋谷のスクランブル交差点の真真中に立っているような状況であった。直接その分野に関わっていなくても、大いに刺激になったことは言うまでもない。また、意外な出会いもあった。その当時は若手の堆積学者であったインド・デリー大学のS. K. Tandonさんである。彼は、岡田先生のもとで、ヒマラヤ前縁部のシワリク堆積体の解析をしていた。強烈な個性の持ち主が多いインド人研究者の中にあって、珍しく紳士であり、かつ、高い見識を持っていた。タンドンさんには、いろいろな視点から議論をしてくださり、私が世界に出る時の後押しをしていただいた。タンドンさんとは、彼が国際地質科学連合の理事を務められていた時に再会し、旧交を温めた。

さて、岡田先生。先生は、訥々と大分弁を喋る、物静かな紳士であった。九州男児というとなんだか豪快なイメージを持つが、大分県・宮崎県という九州の東側の県出身者は、概して物静かな方が多いように思う。九大の先生では、首藤先生、柳田先生なども東側の県出身である。岡田先生は、質問をすれば実に丁寧に教えてくださった。先生の研究室はよく整頓されており、そこには論文リストや研究の単語などが書いたメモが詰まったカードラックがいくつも並んでいた。それをめくりながら、学生に説明するように、堆積物と堆積作用について教えてくださいましたのである。様々な堆積場における底生有孔虫群集の機能について考えていた私にとって、何よりの機会であった。

岡田先生は、全国の若手研究者から送られてきた別刷には、必ず目を通しておられたようで、礼状のハガキに丁寧な字で感想と激励、時にはサジェスションを書き込んで返信されていた。これを受け取った若手がどれほど

力づけられたか想像に難くない。なお、別刷の礼状に丁寧な感想やコメントを書くことは、岡田先生の師である松本達郎先生に倣った習慣でもある。私は、松本先生、岡田先生のお二方から別刷受領のハガキをいただいたことがあり、その都度、そこに書いてある、何気ない励ましの言葉を励みにしていたものである。

このような岡田先生について、とくに記憶に残るのは、現在、千葉大学で教鞭をとっている小竹信宏君の修士論文研究の発表会の時のことである。彼の修士論文の研究フィールドは、房総半島南端部、館山～千倉地域の地質と地層から多産する生痕化石の古生態研究であった。審査会後に、わざわざ研究室まで訪れ、「君の作成した地質図はプレート沈み込み帯前弧部の堆積テクトニクスをよく表現していて素晴らしい。すぐにでも論文にまとめて、投稿しなさい」と、直接、学生に激励してくださったのである。世界の碩学に褒められた20代半ばの学生にとって、どれくらい励みになっただろうか。今でも思い出すシーンである。教員は、学生の発表を聞いて欠点を指摘することは多いものの、良い点を褒めることがなかなかできないでいる。かくありたいものである。

先生は、1984年に、母校、九大に招聘され、転勤して行かれた。それからは、学会以外ではなかなかお会いすることもなくなった。ただ、先生が定年された時、本部長生部長まで勤められた静岡大学において名誉教授に推挙した。その際には、資料作成のお手伝いをさせていただいた。ほんのわずかであるが、ご恩返しのできたのかもしれない。

岡田先生は、晩年になって病を得、厳しい闘病生活を送られていると堆積学研究者の方々から聞いていた。ただ、実際に訃報に接して、寂しい思いをしている。現在、フィールドに基づいた地質学、古生物学の研究は急激に減少している。岡田先生が若手研究者と同じ目線に立ち、フィールドに立脚した研究を評価し、激励されていた姿を思い浮かべ、私たちがフィールド科学振興にもっと努力をしなければならぬと、改めて思う次第である。

庸子令夫人とお嬢様ご一家は、福岡の地で暮らしていらっしゃるかと伺っている。ご家族がお元気で、平安に過ごされることを祈念する次第である。

謝辞

本論をまとめるにあたり、九州大学前田晴良教授、静岡大学北村晃寿教授には岡田先生に関する資料提供をお願いした。記して感謝する。

文献

Okada, H., 1971. Classification of sandstones: analysis and proposal. *Journal of Geology*, 79, 509–525.